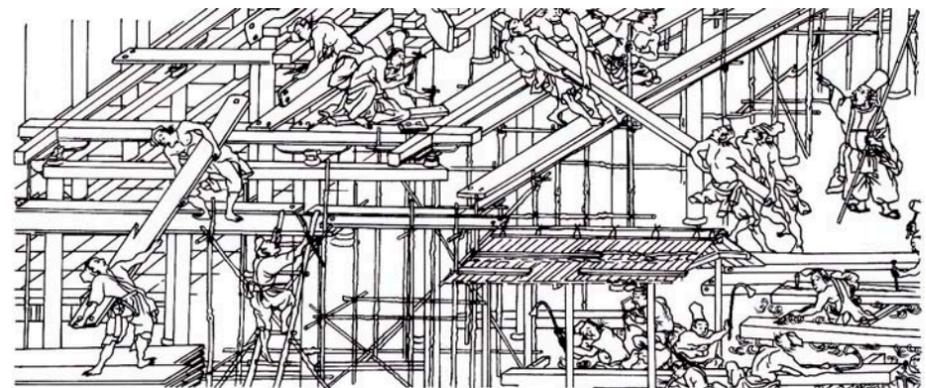


3) 足場用の柱穴について

正殿の建築や解体に伴う足場を組むための柱穴を多数検出しました。礎石を囲むもの、直線的に並ぶものなど、たくさんの組み合わせがあるものと思われます。

柱穴や抜き穴には焼土や凝灰岩のブロックなどが混入しているものがあります。なかでも焼土が入った柱穴の存在は、伊治公皆麻呂の乱の際の火災を示すものとして、重要です。



写真⑨礎石を囲む足場穴（南東から）

絵図に描かれた足場穴の使用例  
(奈良文化財研究所 2003:「古代の官衙遺跡 I 遺構編」)

# 多賀城跡

—正殿跡発掘調査 現地説明資料—  
平成 24 年 10 月 6・7・9～11 日

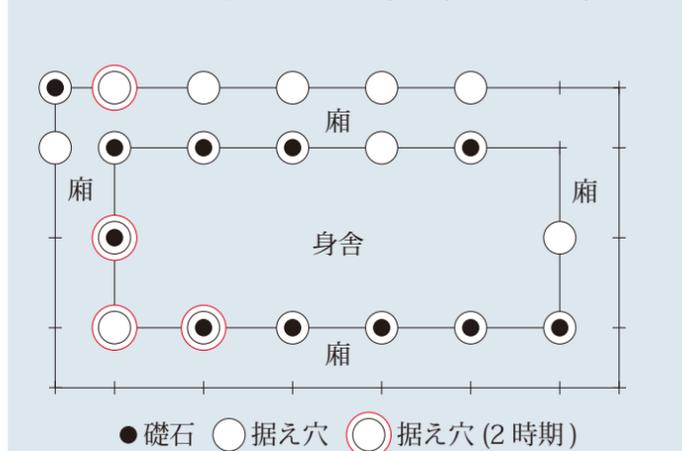
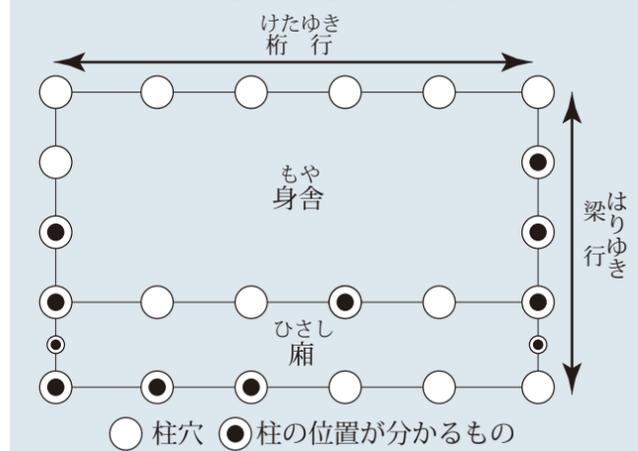


一正殿変遷のまとめ一

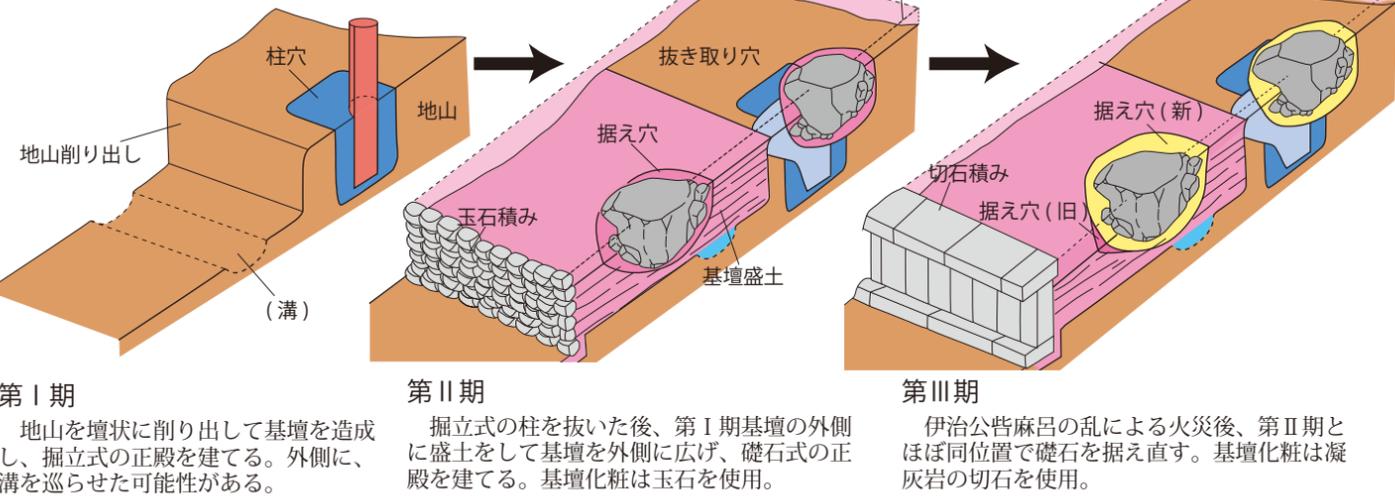
※柱位置模式図はいずれも約 1/300

**掘立式正殿**  
規模・・・東西 5 間 (19.5m)、南北 4 間 (11.8m)  
身舎は東西 5 間、南北 3 間  
構造・・・南廂付掘立柱建物  
時期・・・第 I 期  
基壇・・・地山削り出し  
東西 22.7m、南北 12.6m、高さ約 40cm  
基壇化粧は不明。外側に雨落ち溝か。

**礎石式正殿**  
規模・・・東西 7 間 (22.8m)、南北 4 間 (12.0m)  
身舎は東西 5 間、南北 2 間  
構造・・・四面廂付礎石建物  
時期・・・第 II 期。第 III 期に建て替え。  
基壇・・・第 I 期基壇の周縁に最大 2.6m の幅で拡張  
東西 26.4m、南北 15.6m、高さ 86cm (南側)  
基壇化粧は玉石積み (II 期)→切石積み (III 期)

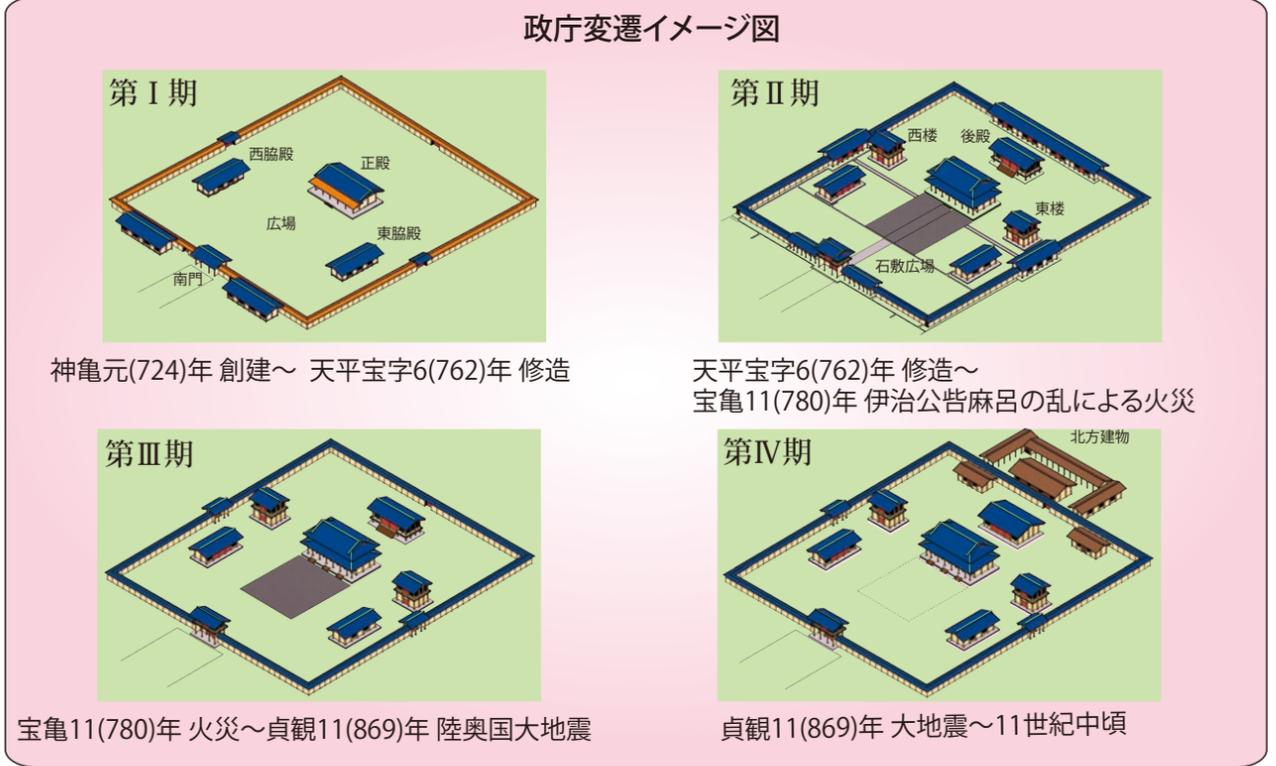


正殿変遷イメージ図



調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字城前  
調査員：佐藤 則之・吉野 武・三好 壯明  
調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長 須藤 隆）  
三好 秀樹・廣谷 和也・高橋 透  
調査主体：宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）  
調査期間：平成 24 年 5 月 8 日～平成 24 年 11 月 (予定)  
調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長 佐藤 則之）  
調査面積：約 410 ㎡  
調査協力：多賀城市教育委員会



# 主な発掘調査成果

正殿跡については、昭和38年と昭和44年の発掘調査で、第Ⅰ期の掘立式による南廂付きの建物が、第Ⅱ期に礎石式による四面廂付きの建物に変わったこと、伊治公咎麻呂の乱による火災後、第Ⅲ期に基壇化粧が玉石積みから凝灰岩の切石積みになったことなどが分かっています。

今回の調査は、復元整備された基壇化粧の内側東西約27m、南北約15mの範囲で主に行っています。前回の成果を確かめると同時に、新たな成果も加わり、より詳しい正殿の様子が明らかになりました。

## (1) 掘立式の正殿について

身舎の柱穴をすべて確認し、これまで2間と想定されていた梁行が3間であることが判明し、第Ⅰ期の正殿が桁行5間、梁行3間の身舎に南廂が付く建物であることが確定しました。また、建物は地面を周りより高く壇状に削り出した基壇の上に乗っています。その範囲は東西が約22.8m、南北約13.1m、高さは約40cmであったことが分かりました。

## (2) 礎石式の正殿について

11ヶ所で元の位置をとどめる礎石、20ヶ所で礎石を据えるための穴を確認しました。据え穴のうち、少なくとも4つの据え穴に新旧の重複があることから、礎石式の正殿に礎石を据え直した建て替えがあることが分かりました。新しい据え穴は、焼土が入っていることから第Ⅲ期のもので、古い方は第Ⅱ期と考えられます。

また、礎石式正殿の建築に際して、第Ⅰ期の基壇の周りに盛土をして範囲を外側に広げていることが分かりました。第Ⅰ期の柱を抜いた後に基壇の周りを少し削り、外側に約2.1~2.6mほど盛土を継ぎ足しています。

これまで、Ⅱ期以降の正殿の建て替えについては不明でしたが、火災後の状況が分かったのは大きな成果です。

第Ⅱ期に盛られた土の厚さは最大40cmで、上面は色や質の異なる土で交互に突き固めています。盛土の下には溝が検出された箇所があり、外側には溝が巡っていた可能性もあります。溝の底面からは第Ⅰ期の瓦が見つっています。



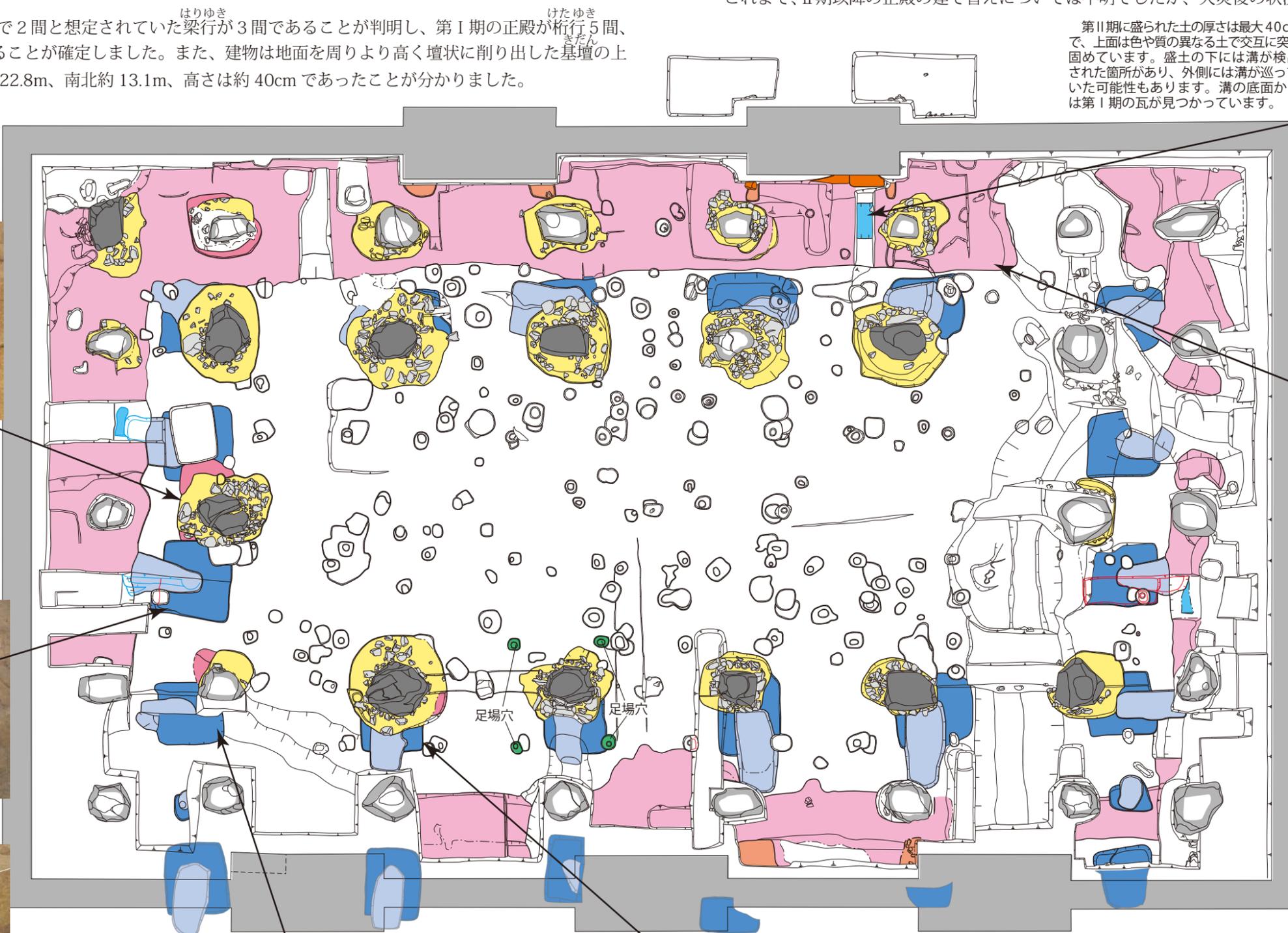
写真① 重複する新旧の礎石据え穴 (西から)  
礎石は、径約1.0mの自然石を使用しています。据え穴は古い方が長軸約1.6m、新しい方が長軸約2.2mの大きさです。



写真② 柱の太さの分かる柱穴断面 (南から)



写真③ 柱抜き取り穴と基壇盛土断面 (上の写真西側拡大・南西から)  
柱を抜く→抜いた穴を埋める→盛土を外側に継ぎ足すという工程がわかります。



第1図 調査区平面図



写真④ 柱穴断面図 (南東から)  
柱穴は1辺約1.4mの方形で、深さは1.4mほどあり、丁寧に埋められています。柱は外側から抜き取られています。



写真⑤ 柱穴と礎石の重複状況 (南から)  
掘立式→礎石式という変遷が確認できます。



写真⑥ 第6次調査 (S44) 正殿全景 (南西から)  
第Ⅰ期の南廂の柱列は復元した基壇化粧の下にあるため今回は東端のみの検出ですが、以前の調査で5間分確認しています。